

[連載]

博士課程生活講座！
～茂木さんに聞いてみよう～

第8回 先行研究の読み方（まとめ編）

茂木俊伸

若手研究者から院生に送るエッセーです。ちょっと先輩の声に耳を傾けてみませんか？ 何か新しい世界が見えてくるはずです。

第8回 先行研究の読み方 (まとめ編)

茂木俊伸 (熊本大学)

このエッセイでは、日本語学・日本語教育学分野の博士課程(博士後期課程)にいる人、または博士課程に進学しようと考えている人に向けて、若手(と言い張るのは無理だと論されるようになった)大学教員が、自分の経験の中で「後輩たちの役に立ちそうなこと」について語ります。

1 はじめに

近年、研究の参考になる情報を積極的に発信する言語研究者が増えてきています。そのお一人、九州大学の下地理則氏は、先行研究のレビューの方法をまとめたYouTube動画を公開してくださっています(下地2021)。

今回は、この動画のポイントと重なる点や、これまでのこのエッセイの内容とリンクする部分も確認しつつ、第4回からしばらく続いてきた先行研究(の読み方・使い方)シリーズをいったんまとめたいと思います。

2 先行研究のまとめ問題

研究は、先人が積み上げてきた学問的成果を踏まえて、新たな知見を提示する行為です。このため、多くの論文には、その問題やテーマに関するこれまでの研究の流れと到達点に触れた「先行研究のまとめ」に相当する部分が設けられています。

これは、実際には、単なる「まとめ」や「紹介」ではなく、論文の以降の内容にスムーズに移行するために、研究史を踏まえた自分の研究の位置

付けや意義を明らかにするパートであるべきなのですが、この点が十分に理解できていない（指導されていない）のかな、と感じることがあります。

先行研究が上手にまとめられない、すなわち、先行研究のまとめが形式的なものにとどまり、その次に来る自分の議論につながっていかないのはなぜなのかをずっと考えていたのですが、最近、その理由の一つは、先行研究の読み方に関する指導の仕方なのかもしれない、と思うに至りました。

3 「先行研究の問題点探し」の功罪

論文は“新しいこと”を書くべき媒体であり、小さなものでも問題点を見つけて解決すれば“新しいこと”を提示した研究になるのだ、という考え方はある意味正しいのですが、それが固定化してしまうと、その先の考え方に進みにくくなるのかもしれない。

学部のゼミでは、しばしば「先行研究を読んで、どのようなものでもいいから問題点を見つけなさい」という形で指導が行われることがあります。時としてこれは細かい粗探しになってしまうこともあるのですが、先行研究を読んで圧倒され納得してしまう段階から、学生の意識を“新しいこと”を生み出そうとする段階へと変えるには、このような指示は有効でしょう。

実際、この意識の変化は大きなものです。どこか他人事として義務的に文献を読んでいた状態から、具体的な問題意識に基づいて“自分ごと”として研究を捉えられるようになり、文献との間で対話が生じるからです。

4 先行研究をまとめる

修士論文、博士論文とテーマが大きくなるにつれて、また、厳密に研究のオリジナリティを追求していくようになると、必然的に、先行研究との対話の範囲、すなわち批判的検討の対象を増やしていくことが必要になります。

しかし、かつての“問題点探し”に意識が集中している学生の先行研究のまとめは、「この研究ではこう言っている（ここに課題がある）、一方、この研究ではこう言っている、さらにこの研究では……」という指摘や評価の列挙になりがちです。これは、下地（2021）が指摘するところの「人や学説の紹介」の形をとって「自分が読んだ歴史をそのまま展開している」パターンです。これは次の図1のように、各先行研究の検討結果がそれぞれで完結してしまっている（一つずつ勝負を挑み、各個撃破しようとしている）状態と言えます。

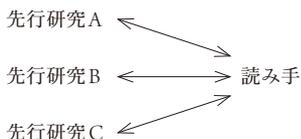


図1 先行研究を読む（各個撃破型）

もちろん、そのテーマの重要な先行研究が複数あれば、それらに十分な言及を行う必要があるのですが、上のような列挙法は、どのような文脈の中でその研究を意味あるものと捉えているのかが見えにくくなる書き方です。

自分の研究の意義を明確に述べるためには、前提となるそのテーマの研究史を示すのが一般的です。先行研究の冒頭にも、著者の問題意識に基づく研究史がまとめられています。しかし、三中（2021:238）も指摘するように、特に雑誌論文などの短い文章の場合、それは「さらりと触れられているにすぎない」ものであるがゆえに「読むときにおそらくもっともハードルが高い」部分です。つまり、私たちがそこで触れているのは本論への橋渡しパートとして必要最低限の情報量に圧縮された記述なのであり、その背景にあるさまざまな情報を意識せずに単純に他者のまとめの真似をすればいいというものではありません。

先行研究は先の図1のような一つずつの“点”として読むのではなく、次の図2のように、その言及関係や研究の流れも踏まえつつ、自分の問題意識に沿って“線”や“面”（第5回）の形で整理・評価する意識が必要でしょう。

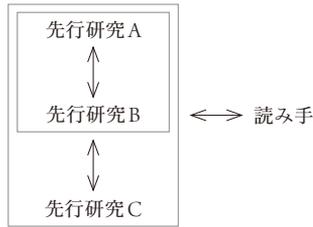


図2 先行研究を読む（見取り図型）

先行研究をまとめるためには、幾重にも積み重ねられた他者による研究史を読み解き、その前後にさまざまな知見を補いながら、自分の研究を位置付ける土台を作る必要があります。その意味で、先行研究のまとめは「誰がまとめても同じようになる」（第7回）ものではないのです。

5 「先行研究はない」作戦は正しいか

先行研究の多いテーマは、研究史のまとめだけでも骨が折れます。一方で、まとめる過程で、それらを整理する観点（切り口）にいろいろな可能性があることに気が付きやすいはずです。

では、先行研究の少ないテーマはどうでしょうか。「管見の限りでは、この問題を検討した先行研究はない。よって、本論文ではこの問題を詳しく分析する」というような意義付けをした論文もしばしば見かけます。

研究が「ない」状態から「ある」状態にするのだ！というのは、確かに新規性のアピールとして最上のものであるように見えます。しかし、このとき立ち止まって考えなければならないのは、「今まで研究されていない」ことだけに立脚した論文にすることの危うさです。

もし、「先行研究がない」ことを論文のセールスポイントとして強調して、実際には存在する重要な先行研究を見落としていたら、どうなるでしょうか。読み手に「この論文があるよ！」と指摘された瞬間、研究の意義（の大半）がなくなってしまう。幸いにも論文の提出前に指摘してもら

えた場合は、不勉強を反省しつつ立て直しを図ればよいのですが、例えば博士論文の口述試験の段階で指摘されても、その場で研究の意義を書き直すことはできません。あるいは、先行研究を乱暴にまとめて「ないことにしていた」場合は、研究不正を疑われても仕方ないでしょう。

そもそも、本当にそのテーマの研究がされていない状況であったとしても、では「なぜ」新たにその研究を立ち上げなければならないのか、言い換えれば、研究史上のその空白を埋めることにどのような意義があるのか、という点の説明が必要です。

下地 (2021) は、先行研究が乏しい場合に「自分の研究を簡単に孤立させてしまう」問題を指摘し、学術コミュニケーションの観点から「研究の道筋」を明確にする必要性とその方法を紹介しています。また、このエッセイの第4回では、「テーマ」と「方法」という軸による先行研究の分類と、それらの読み方について紹介しました。いずれも、より大きな視点から自分の研究を相対化することで、問題の捉え直しを行うことを勧めるものと言えます。

6 おわりに

先行研究との付き合い方はいつまでたっても完璧にはなりません、皆さんの研究に対する情熱を、他者に上手に説明できる形にまとめる手がかりをくれるのも、先行研究です。合い言葉は、「文献を使うべし。されど文献に使われることを許すなかれ」(ベッカー 2012: 220) です。

参考文献

- 下地理則 (2021) 「先行研究レビューについて (効果的な先行研究レビューの仕方)」、九大下地ゼミ×青井隼人学術スキルワークショッププレクチャー動画 <<https://www.youtube.com/watch?v=bKqtZl7Z3c>> (2021年8月25日最終アクセス)
- ベッカー, ハワード S. (小川芳範訳) (2012) 『ベッカー先生の論文教室』慶應義塾大学出版会
- 三中信宏 (2021) 『読む・打つ・書く―読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々』東京大学出版会